

〔注意〕

答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。
本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

何かを学ぶ、というのはどういうことでしょうか。文字を習う、九九を覚える、歴史の年号や科学の法則を暗記する……一般的な学びのイメージは人を「容器」のようなものに見立て、その中にひとつひとつ知識を詰め込んでいく、というのではないのでしょうか。「容器」に入れるべき知識は「大人」によってあらかじめ選別され、ちゃんが入っているかどうかを時折テストで確認される。それを上手にこなした子は「いい学校」に行き、「いい会社」に入って、「いい人生」を送ることができる。だから、しっかりと学ばなければならない、というわけです。

発達心理学から見た学びは、これとはかなり異なります。それは、ひとこと言うなら、ひとりひとりが世界に意味を構成することです。私たちは生まれた瞬間から、必ず何かに接触して生きています。その「何か」と自分との間に「意味」つながりを構成していくこと、それが学びです。お母さんに抱っこされると嬉しい、ハイハイする床がつかめたい、お日さまがまぶしい、花からはいい匂いがする、土は床よりもやわらかい……。そのように考えると、学びの機会がない場所というのは、世界中のどこにもありません。子どもたちは「いい学校」や「いい会社」のために学ぶのだと、目標に向かって仕方なくするものが学びだと思っているかもしれませんが。しかし、そうではなくて、むしろ①私たちはどこにいても、どんな時でも、「学んでしまう」存在なのです。

学びがこのようなものだということを、実は私たちは誰でもよく知っています。幼い頃、畳の縁を「道路」にして、おもちゃの車を走らせたことはありませんか。泥でつくった団子を葉っぱの「皿」にのせて、ままごとをしたことはないでしょうか？ 私たちが、誰に教えられるでもなく、このような「ごっこ遊び」をするようになるのは、私たちひとりひとりに「象徴機能」が備わっているためです。

象徴機能とは、大雑把に言うと、ある物（畳の縁）を別のもの（道路）に見立てる能力のことです。これなしには言語は理解できません。これによって、私たちは新しい意味を創り出すことができます。人間にもしも象徴機能がなければ、「鳥のように」空を飛ぶ飛行機も、「人のように」考える人工知能も、そもそも、「鳥」や「人」といった文字さえもが生まれていないでしょう。遊びは真に新たな意味を作ったり、試したりする場なのです。これを学びといわずして何が学びになるのでしょうか。このように、②学びと遊びとは元々ひとつのものであり、かつ、それは人間にとっては「本能」とよんでも良いほど、本質的な営みなのです。

ではなぜ、このふたつは分離してしまったのでしょうか。現代の日本の学校教育では、子どもたちは年齢ごとに「学ぶべきこと」を設定され、国に決められた教科書に沿って、計画的かつ効率的に「学び」が進められていきます。本来であれば子どもたち自身が自ら構成し、獲得していくはずの「意味」が、標準化された「知識」、既存の「正解」として、外から一方的に与えられるのです。これでは多くの子どもが、学びは将来の目標達成のためには大切だけど楽しくないもの、遊びは楽しいけど無意味なものといった認識を持つてしまうのも無理はありません。

③この誤解は絶望的でさえあります。遊ぶことこそが世界を自分にとって意味あるものとして知ることであり、知の構築なのです。だから、しっかりと遊ぶことは実は楽なものではありません。むしろ時には自分を追い詰め、苦しめることさえあるでしょう。科学者が真理を追求して実験を繰り返す時、絵描きがキャンパスに向かって頭を掻きむしる時、その「遊び」は痛みや悲しみさえ伴うものとなるでしょう。しかし、そうした過程こそが人生の素晴らしさを教えてくれるものではないでしょうか。

イタリアのレッジョ・エミリアという都市では、この「学び＝遊び」と同じような考え方に基いた幼児教育が行われています。そこでは、まさに、子どもは世界と接することで、世界、他者、そして自分を知っていくと考えます。たとえば、海が青いのは空の色が映っているからだ、という「発見」をした子がいるとします。大人はそれを否定するのではなく、「じゃあ、くもりの日はどうかな？」と言って、いっしょに海を見に行く。そこでこの子は何かに気づくはずで、自然の中にある事実を知ります。そして、新たな意味を構成しようとするのです。

世界に意味を見つける、構成する（そこではそれを「探索」と呼びます）のは、どの子にも自然に起こることです。大人の役割はそれを自分が信じる「正解」に導くことではなく、その子がいま世界をどのように見ているのか、どんな意味を創り出しているのかを大人の方こそが学び、その子の発達のための環境を整備することです。それは既存の答えを教えるよりもはるかに大変で、何倍も時間がかかることです。しかし、子どもたちにそのような「学び＝遊び」を保障するのは、その子らの人生を尊重することであり、同時に、その子らを自らの意志を持った「市民」に育てることだとレッジョ・エミリアでは考えられています。

日本の子どもはよく先生に「それを勉強することにどんな意味があるんですか」という質問をします。私もたまに学生から「どの本を読んでおけばいいですか」と聞かれることがあります。しかし、学びが、これまで述べてきたように、ひとりひとりが世界に意味を見いだす、作り上げていくことである以上、このような質問に答えることはできないでしょう。その勉強やその本に「どんな意味があるのか」を知っているのは、
④ だけだからです。私たちは既存の意味に捉われることなく、常に新しい意味を創り出すことができる、いや、創り出さずにはいられないのです。それによって私たちは、この世を生きることの意義を見いだし、唯一無二の人生を生きることができるようになります。

結果を予期しない挑戦、それが学ぶことであり、遊ぶことです。幼い時に誰でももっている、そうした探究心がいつまでも、そして、誰に対しても大切にされる社会、それが私たちには必要です。挑戦が避けられる社会は安心や信頼がない社会です。失敗を許さない社会、変更をよしとしない社会、それでは遊ぶことも、学ぶことも出来なくなります。今までのモノやコトを想像する力、それが「遊び＝学び」の中で培われます。それを通して、真に楽しむ自分に気づき、自らを称えながら生きていくのです。

（石黒 広昭「学ぶことと遊ぶこと」より）

問一 — ①「私たちはどこにいても、どんな時でも、『学んでしまう』存在なのです」とありますが、なぜこのように言えるのですか。

問二 — ②「学びと遊びとは元々ひとつのもの」とは、どういうことですか。

問三 — ③「この誤解は絶望的でさえあります」とありますが、なぜ「絶望的でさえあ」というのですか。

問四 — ④ には、どのような内容が入ると推測されますか。次の中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それを学ばされている子どもの自分
- イ それを学んで先生になった自分
- ウ それを学ぼうと決めた過去の自分
- エ それを学ばなければならぬ今の自分
- オ それを学び終えた未来の自分

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

がしゃん。ぱりん。

また今日も、コップを割ってしまった。きよろきよろして落ち着きのないわたしは、小さな頃から、袖にひっかけたり、取り落したりして、とにかくガラスの食器を割りまくってきた。四つ下で、ダウン症の弟の方が、わたしよりよっぽど慎重だ。彼はまるでビヨコでもすくうかのように、ずんぐりむっくりした手で大切に食器をあつかう。レストランへ行くと「姉ちゃん、あぶないで」と、彼がわたしの袖元からお冷のコップをそっとよけるのを見て、母はたまげていた。

そんな弟がガラスを割ってしまったところを、二度だけ見たことがある。二十五年目を迎える彼の人生で、たった二度だけ。母には言っていない。わたしと弟だけのひみつだ。

一度目は、弟が中学生のときだった。いつも学校が終わると、道草をぞんぶんに食いながらのりくらりと機嫌よさそうに帰ってくるはずの弟が、ちつとも帰ってこない。住んでいるマンションの玄関を出て、エレベーターに乗り、一階のエントランスへ様子を見に行くと、なんとそこに弟がいた。顔を真っ赤にして、両目に涙をため、口をきゅつと真横に結んでいる。弟に対峙しているのは、小学生くらいの男の子が二人、さらにマンションの管理人だ。そしてなにより驚いたのは、エントランスのガラス扉が、派手に割れていたことだ。

「なにごとですか」

ぎよつとして、わたしがたずねる。膠着状態の子どもたちに代わって、状況を説明してくれたのは管理人だった。

「ガシャーンって大きな音がしたんで見にきたら、この子たちがいてね。事情を聞いたら、『岸田さんとお兄さんが突然、暴れて割った』って言うもんだから」

① 暴れて、割った。

一旦、落ちついて想像してみたが、想像ができなかった。弟は、いつもと違うことが起きたり、泣きわめいたりしている人を見ると、たしかに状況が飲み込めず、パニックになることはある。だけど、人やものを傷つけるようなやつではない。彼にとっては、命があるものも、ないものも、② すべてビヨコなのだ。

「そうなの？」

弟にたずねる。弟は、ぼろっと大粒の涙を流して、ぎゅうつと唇を噛み、首を横に振った。男の子の一人は、サッカーボールを持っていた。ちょうどエントランスの前は、子どもたちがボール遊びをする広場になっている。

「本当にうちの弟が割ったの？」

男の子たちは顔を見合わせて、気まずそうにした。結局、わたしがエントランスにある監視カメラを見ましようと言うと、彼らはあわてはじめたので、管理人が察したのか「今回はいいですよ」と言い、その場は解散になった。

弟の背中に手をあてると、ぶるぶると彼がふるえているのがわかった。怒りだろうか、悔しさだろうか。どちらもだ。家についてから、③ 二人でわんわんと泣いた。感情も思いやりも、彼の中には立派に育っているのに、それを人に伝える言葉を持ちあわせていない。どれだけの無念だろうか。

二回目は、つい先月だ。順調に物忘れがひどくなった祖母が、勘違いで弟を責めてしまった。弟は一生懸命に身振り手振りで弁明するが、耳が遠くなった祖母には届かず、怒りは一方的にヒートアップしていく。最終的に弟は「もういいー!」と言って退散したのだが、腹いせに扉を強く閉めたせいで、扉のガラスが砕け散った。弟はべそをかきながら落ち

込んで、背を丸くしてガラスを片づけていたが、それを手伝うわたしも落ち込んでしまった。④とがって散らばった破片は、声にならない声のようだった。彼にとつては、生き物を殺したも同然である。それほどまでに人は、激しい悲しみや怒りを、黙って胸に留めてはいられない。

弟は、わたしには想像もつかない景色を見て、到底信じられないものに愛を注いでいる。それが伝わらない世界に、何度、絶望したことだろう。ガラスを割ったとき、いつも彼はめそめそと泣いていた。それでも弟は、ガラスを注意深く拾い集めたら、多少は軽くなった心で立ち直り、別の愛しいものを見つけて、機嫌よくたくましく、できるだけの幸せを探して生きている。まるでずっと前から、そう決まっていたかのように。

姉として、作家として、ひみつを共有する者として、わたしにできることは。同じ理由ではもうガラスが割られることのないように、弟の言葉にならなかった言葉を、理屈じゃ説明できない何かを、深く想像し、何度も物語にし、愛を持って語り継いでいくことだ。

(岸田 奈美「ガラスのころ」より)

〔注〕ダウン症……ダウン症候群。生まれつき発達の遅れをとまうことが多い。

対峙……対立する者がにらみ合ったまま動かないこと。

膠着……ある状態に固まって、一向に変化しないこと。

問一 — ①「暴れて、割った。」とありますが、この一文の書き方にはどのような効果がありますか。

問二 — ②「すべてヒヨコなのだ」とは、どういうことですか。

問三 — ③「二人でわんわんと泣いた」とありますが、「弟」と「私」はそれぞれのどのような気持ちだったと思われる
ますか。

問四 — ④「とがって散らばった破片は、声にならない声のようだった」とは、どういうことですか。

〔三〕カタカナは漢字に直し、全体をていねいに大きく一行で書きなさい。

サキんずればヒトをセイす

令5	中	国	5	5
----	---	---	---	---

四

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

花時計

木坂 涼

長針と

短針をちようだいしたこと

今ではすこし

悔やんでおります。

先祖代々

種子のころより

太陽の位置

気温

星の傾き加減にて

わたしたちの時間は測られてまいりました。

目の前に直接せまりくる

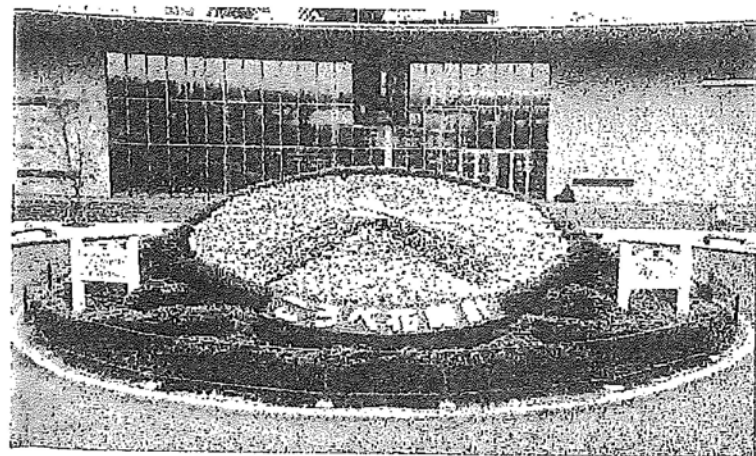
刻一刻を

お返ししとう存じますが

いかがでございましょうか。

花一同。

〔注〕花時計……左の写真のように、時計の文字盤にあたる
ところを、花で飾った時計。



（写真は、神戸市ホームページより）

問一 「悔やんでおります」とありますが、それはなぜですか。

問二 「ちようだいした」「存じます」「いかがでございましょうか」などの言い方から、どのようなことが読み取れますか。

令5
中
国

解
答
用
紙

受験番号
氏 名

評 点

一

問一			
問二			
問三			
問四			

二

問一		
問二		
問三	私	弟
問四		

三

--

四

問一	
問二	

国語

訂正 ていせい

問題用紙 1 / 5 (二枚目)

① 次の行

(誤) 畳たたみの縁ふちを「道路」にして、
……

(正) 畳たたみの縁へりを「道路」にして、
……

問題用紙 4 / 5 (四枚目)

二 問三

(誤) 「弟」と「私」はそれぞれ……

(正) 「弟」と「わたし」はそれぞれ……

解答用紙

二 問三

(正) わたし

問三	
(誤) 私	弟
……	……